



人に与えられた使命

「高杉晋作」については、ご存知の方も多いでしょう。

さて、「天野清三郎」という名前を知っておられますか。知っておられる方は、よほどの維新通の方なのではないでしょうか。

「天野清三郎」をここで紹介をしたいと思います。

天野清三郎は15歳で松下村塾に入塾した。

4つ年上の先輩に高杉晋作がいた。

清三郎は晋作とよく行動を共にした。

だが、清三郎は劣等感を覚えるようになる。

晋作の機略縦横、あらゆる事態に的確に対処していく姿に、

とても真似ができないと思い始めたのである。

では、自分は何をもって世に立って行けばいいのか。

清三郎には胸に刻まれているものがあつた。

「黒船を打ち負かすような軍艦を造らなければ日本は守れない」という松陰の言葉である。

「そうだ、自分は手先が器用だ。船造りになって日本を守ろう」

真の決意は行動を生む。

24歳で脱藩しイギリスに密航、グラスゴー造船所で働くのである。

そのうち、船造りの輪郭が呑み込めてくると、

数学や物理学の知識が不可欠であることが分かってくる。

彼は働きながら夜間学校に通い、3年間で卒業する。

当時の彼の語学力を思えば、その努力の凄まじさは想像を超えるものがある。

しかし、3年の学びではまだおぼつかない。

さらに3年の延長を願い出るが、受け入れられない。

そこで今度はアメリカに渡り、やはり造船所で働きながら夜間学校で学ぶのだ。

ここも3年で卒業する。

彼が帰国したのは明治7（1874）年。31歳だった。

清三郎は長崎造船所の初代所長になり、日本の造船業の礎となった。

一念、まさに道を拓いた典型の人である。・・・

「心に響く小さな5つの物語」（致知出版社）

人には、生まれたときからその人に与えられた使命があるのでしょ

う。高杉晋作には、人を魅了する類まれなるリーダーシップがありました。騎兵隊を組織して、幕府による長州征伐から長州藩を救うなど、幕末大活躍をすることでその使命を果たしました。

清三郎は、そんな晋作を見て、同じことをしてはかなわない。自分は自分、自分にできることで、日本に尽くし、その使命を果たそうとしました。留学先のイギリスでは、手先が器用だけでは船は造れない、船を造るには数学や物理学の知識が必要であることに気づき、勉学にも没頭するようになります。おそらく、言葉も危うい清三郎は寝る間もなく勉強したことでしょう。ひとえに、「国を守ろう」「新しい国を造ろう」という強い思いが清三郎を動かしたのです。船を造ることが清三郎の使命だったのです。

わたしたちは、自分に与えられた使命にはなかなか気づきにくいものです。その時、その時を真剣に、一生懸命に生きること使命に気づけるのではないのでしょうか。

子どもたちに、晋作や清三郎のような歴史上の人物に触れさせましょう。この冬休みに子どもに「伝記」を読ませたらいかがでしょうか。きっと子どもたちの心に何か大切なものが芽生えるはず

青少年育成センター指導員 藤村